



TITLE:

きらめく動物たちの命と海:久保田  
信の白浜だより(その12)

AUTHOR(S):

久保田, 信

---

CITATION:

久保田, 信. きらめく動物たちの命と海:久保田信の白浜だより(その12). うみひろも 2011, 86: 15-18

ISSUE DATE:

2011-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180234>

RIGHT:

© 海の生き物を守る会

## 4. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その12)】

### 田辺湾はヒドロクラゲの宝庫

系統分類学には色々な醍醐味がある。その1： 世界で誰も知らない新種を見つける。

その2： 他国では知られているが、日本では初めて確認された種を記録する。3： 特定の地域に特定分類群が何種生息しているかを明らかにする。最後に挙げたテーマは、春夏秋冬、長年をかけ、その区域の様々な生息場所から、緻密で根気のいる採集と標本調査が必要である。なべて、古今東西の関連するすべての文献の渉猟と照合も要求される。

今回紹介する刺胞動物門ヒドロクラゲ類は、京都大学瀬戸臨海実験所の歴代スタッフの貢献が大きい。刺胞動物門鉢虫綱に属するイラモや有櫛動物門のクシクラゲ類の系統分類でもよく知られる駒井 卓初代所長や時岡 隆第7代所長、刺胞動物門八放サンゴ類の系統分類学もご専門の第5代所長内海 富士夫先生、さらに宮下 義信助手のヒドロ虫類の研究などだ。中には、日本ではそれきりという新種もある。最近でも田辺湾からは日本

新記録種がいくつか採取されてくる。たった1個体どまりの種もあれば、何度もとれる種もある。

## 田辺湾周辺に 118 種のヒドロクラゲ

本シリーズでこれまで話題にあげた様々な種を含め、ヒドロクラゲは、田辺湾周辺には少なくとも 118 種が生息していることが分かっている。この種数は、昭和天皇陛下が生涯をかけて明らかにしてこられた相模湾からの記録や、北海道大学理学部系統分類学講座の歴代の諸先生方が解明された厚岸湾からの記録に匹敵するか、あるいはそれを上回る多様性を示している。このように、田辺湾はヒドロクラゲ相が日本で最も詳細に解明され、ヒドロクラゲの種類がたいへん豊富な海域である。これは、長年のたゆまぬ蓄積があったからである。

私は、春や夏の学生実習などでは、田辺湾のプランクトンを見せている。様々な終生プランクトンや、幼生を中心とした一時プランクトンにも焦点をあてている。プランクトンネットで田辺湾から採集するクラゲ類は、ポリプを持つ一時プランクトンが多い。他の一時プランクトンとこのクラゲとの大きな生態的な違いは、未成熟な幼生ではなく、成体あるいはそれに近い発育段階である点だ。

クラゲは球形にならず、触手なども四方八方に伸ばし、少しでも抵抗を大きくして海の底に沈まない体のつくりになっている。実習ではこのような浮遊適応についても説明する。系統発生が個体発生から連綿として反復されることや、海流や沿岸流によって種の分布を拡大する役目を持っていることにも注意を喚起する。最後には、「食うか、食われる」もからんだ網の目のような、複雑な関係も考えてもらう。

## 田辺湾のヒドロクラゲ類の内訳

わが国でこれまで正式に報告されている、沿岸域で見られるヒドロクラゲの種数は 221 種であるから、少なくともその 65% が田辺湾周辺から記録されていることになる。これはすごく高い発見・生息・記録率である。田辺湾で見られるヒドロクラゲの内訳は、花クラゲ類が最も多く、42 種が記録されている。この類は、たとえばベニクラゲのように、クラゲもポリプも色が美しく、多彩な形態をしている。世界的にも白浜で初めて発見された種がいくつかある。ポリプには変わったものも多く、他の動物に共生している種が知られる。海綿、貝類、エビ・カニ類、ホヤ類、はては魚にまで付着している。

北浜に漂着する青いクラゲ、ギンカクラゲやカツオノカンムリは、かつて盤クラゲ

類にまとめられていたが、今は花クラゲ類に所属が変わった。この群体がクラゲなのかポリプなのか問題とされているが、花クラゲ類のある種のポリプの花の部分に相当するので、浮遊性のポリプだという意見が強い。しかし、果たしてそうか。これらは群体ではなく、1個体とみなすべきだとの意見もある。

花クラゲ類の次に豊富なのが軟クラゲ類で、33種が記録されている。この仲間はコザラクラゲのように、清らかで白色を基調としており、深い傘をしていなくて、浅いお皿形である。そのポリプは見事な幾何学的な群体であることが多い。興味深いことに、大きくて規則的な群体をつくる種は、クラゲつくりを止めてしまったものが圧倒的に多い。北国にいくほど、このようなクラゲを出さない群体が多い。白浜では、冬季に磯へ行くと、シログヤが普通に見られる。シログヤは夏の間は根の形で眠ったままであるが、水が冷たくなってくると目を覚まし、群体が伸び出してくる。残念ながら、その美しい姿に反してシログヤは刺胞毒が強い。うっかり素手でさわると刺されて腫れるので、要注意である。

続いて多いのが管クラゲ類で、28種。この仲間はヨウラククラゲのように、ガラス細工のように繊細で美しい。だが、丁寧に採集してもすぐにバラバラになってしまう。薬品で固定しても同じように断片になる。管クラゲは『繰り返し構造』をもった群体なので、単位ごとにばらばらになっても再生してクローンとして増やしていける。ロケット形の部分をもつものが多く、ジェット噴射して力強い拍動遊泳をする。

残りはすべて10種もないマイナーな分類群である。そのうちの淡水クラゲ類は海水にいる種の方が断然多いので、ちょっと誤解を受ける名称かもしれない。このクラゲは大きくて、刺胞毒が強いものが多い。たとえばハナガサクラゲはこの一員である。藻場にいるほとんど泳がないクラゲたちもこの仲間である。逆に、ポリプはとても小さく、立方クラゲに類似して目立たない。だから野外からとても発見されにくい分類群で、未知のものも多い。

カラカサクラゲに代表される硬クラゲ類や、ニチリンクラゲが属する剛クラゲ類は、湾内には住まず沖合で一生を送る終生プランクトンである。付着世代を送る発育段階のポリプをもたない硬クラゲ類に対して、剛クラゲ類は、若い時代に他の浮遊性のヒドロクラゲに寄生する変わり者であるが、繰り返して説明するが、その一生の舞台は外洋である。

最後に挙げるのは、砂粒の間で生きるごく小さなアクチヌラ類である。クラゲのようでポリプでもある両者が合体したものである。私は、まだ生きたのを見つけたことがない。日本から正式な記録はないが、田辺湾では以前から発見されている。以前に水族館の特集展示の向かい側の写真解説コーナーで、その一員として紹介したことがある。



図. ヒドロクラゲ類では特大のハナガサクラゲ（淡水クラゲ類）